

チ ム ワ ー ク

男女共同参画社会を意識した取組み

- (1) 主題名 男女の敬愛 [2 - (4)]
 (2) ねらい 男女が互いに独立した人格として尊重しあうことの大切さを理解する。
 (3) 資料名 「チームワーク」
 (4) 授業の展開例

	学 習 活 動	主な発問と生徒の心の動き	留 意 点
導 入	1 主題を知る。	世の中にはいろいろな仕事があるが 次にあげる職業は男性、女性のどちら のイメージかを答えてください。 ・学校の先生 ・幼稚園の先生 ・銀行員 ・医者 ・警察官 ・新聞記者	2 色の色カードを配布して、 いずれかを掲げることによって 意思表示させる。 職業と性に対する先入観の問題 を意識させる。
展 開	2 資料を読み、 これまでの「私」 について知る。 3 「私」の生き 方について考える。	A と出会う前の私はどんな仕事ぶり でしたか。 ・自分の仕事だけして満足していた ・周囲の助けに気付いていなかった 「素人」と言ったAは、私のことを どのように見ていたのだろう。 ・チャラチャラした自信過剰な女 ・仕事を理解していない素人 「素人」と言われた私は、A のこと をどのように受け止めたのだろう。 ・A は女をばかにしている ・礼儀知らずで身勝手な男 意地を貫いて取材をとってきた私に A はどんな気持ちで声をかけたか。 ・ひどいことを言って悪かった ・私のことを誤解していて悪かった ・仕事への思いは本物で信頼できる A との仕事のどんなところにやり甲 斐と喜びを感じていると思うか。 ・A に自分の能力を認められた ・互いに仕事に対する真剣な気持ちが 信頼できるようになった ・女性であろうと仕事のできた誇り	女性ジャーナリストとして夢 を実現し満足していた私に気 付かせる。 仕事に対する思いを共有する ことで変わっていくA と私の 心情の変化に焦点を当てて展 開するようにしたい。 若い女は仕事ができないとい う偏見を持って接していたこ とを後悔し、正當に評価して いる点に着目させたい。 個人の能力を正當に評価され た満足感、誠実な仲間との信 頼関係がより高い能力を引き 出すことを押さえる。
終 末	4 教師の説話を 聞いて、主題を 味わう。	男だから、女だからという見方は、 ときに偏見を生み、人の能力を発揮 させないまま埋もらせてしまう。男 女が協力できる社会が理想。	導入での問いに戻り、男女の 役割分担の望ましい在り方につ いて問いかけたい。 「心のノート」P.53 を活用す る。

「チームワーク」

高校で放送部の活動をしていた私は、将来アナウンサーとしてテレビ画面に映る自分を想像し、夢を育ててきた。大学を卒業して念願の放送局に入社したのは、五年前のことだ。夢を実現させることができたのである。

入社早々、私はアナウンサーとしての自信を少なからずなくしてしまった。同期は皆、声もいいし発音も私より美しい。しかも、研修で私たちを指導する先輩アナウンサーは、私とは比べものにならないほどなめらかに表現力豊かに話していて、文章を読んでいるという印象はまるでない。先輩のアナウンスに比べたら、私のは小学生の朗読に等しかった。しかし、ここでくじけるわけにはいかない。私は家に帰っても必死で練習した。先輩の本番には、一言も聞き漏らすまいと集中して、気付いたことをメモし、そして家でそれをまねてみたりした。とにかく時間が欲しかった。暇な時間などこの頃の私にはなかった。

こうした努力が実ってか、五年経った今では、同期の中でも私の存在は目立つ方になった。実際にテレビに映るのはローカルな記事ばかりで、どこその桜が有名だとか、祭の準備で盛り上がっているとか、温泉地の紹介、といったもので、もう少し重要な問題について取材をしたかったが、使ってもらえるだけありがたいと、それなりに満足していた。「美人は得だ」といったイヤミを言う者もなかにはいたが、そんなことは気にならなかったし、私の実力で勝ち取った仕事だと思っていた。事実、いっしょに仕事するカメラマンの人たちは、「君のアナウンスは明るくていいね」「親しみやすい話し方だ」と私のアナウンスをほめてくれるし、少し早口になるのが気になるが、わかりやすいと言われることが多かった。私は自分の技能に自信を深めていった。また、ほとんどのカメラマンたちは男性で、初めの頃こそ気をつかうことも多かったが、難しいことや大変なことは引き受けてくれる優しい人たちがほとんどなので、私は自分の仕事にだけ専念すればよかった。その居心地のよさにいつしか私は慣れていった。それが当たり前だと思っていた。Aと仕事をするまでは。

ここ一ヶ月、カメラマンのAといっしょに仕事をしている。ある地域の自然保護に関する問題で、干潟を残したいという住民と、地域の活性化のために開発するべきだという住民との二つのグループの論争に焦点を当てて報道しようとしていた。めったにない大仕事に、私の気持ちはわきたった。これで私も、いよいよ本格的なジャーナリストになれると思った。ところが、事前の取材交渉の段階から私とAとは真っ向から意見が対立した。「全く、何にもわかつちやいないんだ。なんで、オレがこんな小娘と仕事しなきゃいけないんだよ。この仕事はお遊びじゃないんだぞ。これまでのようなチャラチャラした取材とは違うんだ。」

「これまでだって、遊びで仕事したことありません。チャラチャラした取材ってどういう意味ですか。」

「若い娘が取材しているのをまじめに聞くような視聴者がどこにいる。これまでの仕事は単に暇つぶしの聞き流しなんだよ。本当の取材ってのは、こちらの伝えたい意志ってもんがあるんだ。君みたいな素人に何がわかる。」

腹の中で怒りがぐつぐつと煮えたぎっていた。感情が高ぶって、頭がクラクラしてくる。

「素人かどうか、私の案で取材してきますからそれを見て判断してもらえますか。」

「いいだろう。幸か不幸か時間はあるんだ。まずはお手並み拝見しよう。」

若いから、女性だからという理由でどうしてこんな言われ方をするのか。怒りにふるえながらその場を離れた私は、心に誓っていた。

（思い知らせてやる！絶対に！！）

翌日から、私は一人で取材に入った。しかし、これまで取材の準備は全部カメラマンがやってくれていたのである。私は要領がわからないままやみくもに走り回る結果となった。しかも、取材のお願いに行くと、必ずもの珍しそうな顔で見られた上、断られた。中にはあからさまに

「女の記者さんか。他に責任者はおらんの。あんた一人じゃ、信用できんね。」

そう言っただけで、追い返す人もあった。これまで私は取材準備をカメラマンの人たちがやってくれていたのを優しいからだと思っていた。今になって思えば、女の私にはできないと思われるのだ。自分の未熟さに思い当たり、悔しくて涙が出そうになる。

（取材してくると言い切ったんだ。とにかくやりきらなきゃ。泣いてなんかいたら、女はそうやって泣いて済ませようとする、なんてまた言われかねない。）

意地だった。そして、何とか取材に応じてくれる住民が見つかった。

「明日、取材をします。相手にはアポを取ってありますので、撮影してもらえますか。」

Aにそう言つと、私は相手に反論させないくらい早口で明日の取材の内容をAに説明した。「わかった。」Aは一言そう言っただけだった。

翌日、Aといつしよに約束の場所に行き、取材を始めた。今回は住民の意見をわかりやすく伝えるだけでなく、反対意見と対立している部分を客観的に伝える必要がある。私はこれまで身に付けてきた技術をすべて出し切った。これでNGが出せるなら出してみろ、という気迫でやったと思う。

「私の案はどうでしょう。意見を聞かせて下さい。」

撮影の後、私はAがどんなところで言いがかりをつけてきても反論できるよう身構えて聞いた。

「いいだろう。報道のねらいは伝わってきた。少し気になるところもあるが、取材の切り口としてはおもしろいな。それにしても、よくねばったもんだ。」

（え？）反論されるものばかり思っていた私は、拍子抜けしてしまった。

「ただし、オレは全面的に君の案で行くとは言っていないぞ。君の案では」

それから、延々と議論が始まった。Aは、今日撮った映像を見せて、私の取材の中の足りない部分を指摘し、どのように伝えればいいのかを具体的に説明した。私も自分の意見を述べた。以前、怒りと不信感から感情をぶつけ合ったことなど不思議と忘れていた。私たちは互いの意見を理解しようとし、よりよい作品を作ろうとしていた。

この日から私たちの関係は変わった。Aの仕事に対する真剣な気持ちが伝わり、Aとのチームワークに大きなやり甲斐と喜びを感じるようになった。Aも私の意見を聞いて、納得すれば採用してくれる。互いの信頼関係が深まり、私はこの上ない充実感を感じている。

先日、こう言っただけでAが笑ったことがあった。

「よく一人で取材の相手を見つけてきたな。この仕事は女にはできないと思っていたよ。だが、その考えがもう古かったんだな。オレも変わらなきゃな。」

この取材にかける残された時間も少なくなった。仕事と真剣に向き合い、仕事の厳しさを教えてくれたAと出会って、私は少しばかり成長できたような気がする。

活用に生かすための実践報告

「チームワーク」

1 主題の設定

現代は、男女が共に社会の対等な構成員としてその活動に参画することを目標としている。性差により個人の能力が適切に評価されなかったり、力を発揮する場が制限されたりすることがめずらしくなかった時代に比べ、男女共同参画社会が唱えられる今日、こうした問題は少しずつ解消されてきている。中学生にとって、男らしさ、女らしさのイメージも変化してきていると思われる。特に労働に関しては性別を問わなくなりつつあり、個として能力を発揮することが求められている。将来を担う中学生が古い因襲にとらわれることなく、異性に対し相手を一個の人格として尊重しようとする態度を身につけることにより、男女共同参画社会の実現を図りたい。

2 指導過程の工夫

導入では、社会、特に職業と性に対する先入観から課題意識を喚起させた。また、終末に再度取り上げ、現代社会の課題と将来の展望を考えさせるようにした。展開では、資料にしっかり感情移入させ、後段で主人公の充実感に共感させることにより、望ましい社会の在り方について実感を持ってイメージできるようにした。

3 発問の工夫

Aとの出会いが主人公の職業人としての生き方にどのような影響を及ぼしたのか時間を追って問うことにより、仕事仲間として互いの意見をぶつけ合える対等な関係を育てていった点に注目させ、性差による偏見を見抜き、個々の能力・特性を生かした

職場、ひいては社会のあり方について思い至るよう意図した。

また、個人の能力を正に評価された満足感、誠実な仲間との信頼関係がより高い能力を引き出すことを押さえることが重要である。

4 生徒の反応（授業後の感想）

女性に対する不当な扱いに関心が集まり、怒りを訴える女子生徒が多かった反面、Aや男性が偏見をもついわば悪役ととらえられたためか男子生徒には発言がしにくい様子が見られた。男女共同参画社会の在り方について考えを深めるためには、女性が差別され、男性が差別するというステレオタイプの展開ではなく、男子生徒も女子生徒もそれぞれの性を見つめながら活発に議論できる発問の工夫が大切である。具体的には、男性であるAの立場からの意見を引き出す工夫の必要性を感じた。たとえば、資料を2段階に分けて提示することにより、Aの目から見た「私」の甘え、さらに仕事に打ち込むことによる変容に着目させるとより効果的であると思われた。

5 実践者からの一言

男女の敬愛を抽象的な理想論でなく具体的に討論させたいと考え、本資料を作成した。中学生にとって女性蔑視の風潮は身近ではない。しかし、互いを思いやる気持ちを大切にしながら男女共同参画社会を実現させるため、将来、自己実現の場となる職業（職場）について中学生の段階から考えさせたいと思った。

（戸坂中学校 松原千奈美）